

# mediopos 14

2015.10.8 ~ 2015.11.1

【神秘学ポエジー～風遊戯 第33集】

media-photo-poesie ヴァージョン

mediopos326-350

神秘学遊戯団



■高野秀行・清水克行 『世界の境界とハードボイルド室町時代』（集英社インターナショナル 2015.8）

「清水 『謎の独立国家ソマリランド』の冒頭、エビグラフに「今まで見てきたことや聞いてきたことが、全部でたらめだったとしたら面白い」というような言葉が書かれているじゃないですか。／高野 ブルーハーツですね。「情熱の薔薇」の歌詞を引用したんです。／清水 あれはまさしくその通りだなと思って。僕は学生に対していつも言ってるんですよ。今生きている社会がすべてだと思わないでほしいって。それとはぜんぜん違う論理で動いている社会があるんだし、我々の先祖の社会にも今とはぜんぜん違う仕組みがあった。その仕組みを勉強しても直接的には役に立たないけれど、そういう社会があったってということを知るだけで、ものの方見方が多様になるんじゃないかって言っていますね。／高野 僕は、現代日本の方がむしろ特殊であって、アジア・アフリカの境界や室町時代の日本の方が、世界史的に普遍性をもった社会だったんじゃないかって夢想することがありますよ。／清水 そうだと思います。江戸時代という特殊な時代を経て、その延長線上が今の日本社会だと考えると。／高野 今の日本社会は人類社会のスタンダードではないし、僕たちの価値観だってそうですよね。自分は今たまたまここにいるだけなんじゃないかっていう気がときどきするんですよ。／清水 しかも、今、中世からずっと続いてきたムラ社会が壊れてきているわけですよ。自明とされてきた社会がだんだん溶け始めている。そうすると、今後どうなるかわかりませんが、またソマリのような、あるいは室町時代みたいな社会に戻らないとも限らないですよ。人類は一方だけに向かって進化しているわけではないので、何かの揺り戻しが起きたとき、日本社会の皮を一枚はがしてみたら、室町的なものが出てくるんじゃないのかな。」

そうでなくてもいいなら  
やってみよう

ぜんぶでたらめだったら  
わくわくするな

ぼくはたまたまここにいて  
いまをたまたま生きている

ここが中心でも周辺でも  
そんなことはかまわない

普遍でも特殊でも  
どうでもいいじゃないか

役に立つだなんて  
気にしないでいよう



■ミシマ社の雑誌『ちやふ台』（ミシマ社 2015.9）

藤原辰史が語る「食、戦争、そして」

「『ナチス・ドイツの有機農業』（柏書房）って本を書いたとき、「有機農業を愚弄している」といわれることを心配してんですけど、あまりありませんでした。むしろ僕がやりたかったのはナチスから有機農業を守るといこと。／でも、今のオーガニックブームは気持ち悪いところもあります。一つは「選民思想」的で自分さえよければいいという雰囲気がある。それに健康志向すぎて「オーガニック＝健康」に結びついている。有機農業というものが孕んでいたはずのいろんな課題というのが、「健康」「安心」といったものでかたづけられてしまっている。／有機農業はもともとどうい運動だったかといえば、「化学肥料と農業の批判」なんです。農業、化学肥料を使わないってことがどういう政治的な意味を持っているのかを意識した上で作られた運動だったわけです。自分の哲学をきちんと持った人たちが周囲の冷たい目にさらされながらがんばった。けれど、いつの間にか「オーガニック」とカタカナで書かれるようになって、なんとなく高所得者層の人が買うようになってから、少しずつプライベート化していく。「オーガニックを買う」といった発想になっていく。自分の家族が健康であるために買うというふうに。でもそれは有機農業の後退だともいえます。

――プライベート化、個別化っていうのは、他者を排除するという方向になっていきがちですよね。

僕自身は有機農業が普及することにすごくポジティブだし、家族とか大切な人を守るっていうのは人間の根源的な願いの一つですから、それを否定するつもりはまったくありません。ですけども、もう少し原理原則的に考えると、有機農業原理主義よりも、「どんな食べ物でも自分はきっちり味わって食べ尽くす主義」のほうが信頼できるんですよね。たとえ農業や化学肥料を使ったものであっても、「食べ物である以上大切に食べます」という人のほうが、「わたしオーガニックじゃないとダメなの」って人よりは信頼したいなと思います。」

良い食べ物が  
心にも良い食べ物で  
ありますように

たくさんのお金が  
心にもたくさん良いものに  
変わりますように

ひととの違いが  
ひとの上にも下にも  
自分を置きませんように

良いものをつくるのが  
みんなのなかのすべてを  
良きものにつなげますように

すべては  
わたしのなかのみんなで  
みんなのなかのわたしですから

# mediopos-328

2015.10.10



## ■川邊りゑこ『ことたまのかたち』(工作舎 2015.9)

(呼吸する文字)「古人は見えないものを見／聴こえないものを聴くことができた／風の音／鳥の声／季節ごとの雨の音／神代文字の波動が発する音が聴こえてくる／古代、自然の一部として生きる人間のエネルギーは、いまの私たちとは比較にならぬほど強力だった。／古代の思想を紐解き、古代の文字を書いていると、その文字が呼吸し、生きていることを身をもって感じる。／宇宙創生のはじめの行為が言霊の発動だったとする伝承が、世界各地に残されている。その根源的な響きは、声と一体だった。／古代の人々は、聴こえる聴こえないにかかわらず、言葉にあらわされた魂を尊んだ。ソシュールが指摘するように、言葉は思考と音が一体化するかたち。／言霊が真理と対話するとき、文字は音までも発し、

言霊が言葉になる

言葉が文字になる

文字が記号になる

見えないものが

見えるものになるとき

見えないものは失われた

聴こえないものが

聴こえるものになるとき

聴こえないものは失われた

見えないものを見るために

聴こえないものを聴くために

言葉に息を吹き込まなければならない

記号が文字のかたちを取り戻し

文字が言葉へと声を取り戻し

言葉が言霊へと復活するために



■富田恭彦『観念論の教室』（ちくま新書 2015.9）

「人はなぜ『暗い』観念論に魅力を感じるのでしょうか。私はそれを、何を大切に思うかの問題だと考えています。／この世界があって、私の死後もそれはなんらかの形で存続し続ける。人びともまたしかり。私がいなくても、この世は存在し続ける。――普通私たちはこんなふうに思って生きていますよね。それでいいと思えば、どうってことはありません。でも、私がいなくなるときには、この世界のことも、一緒に生きてきた人々のことも、私自身にとってはもう何の関係もなくなる。死とは、そうした、みんなや世界との関係の断絶だというふうにも考えられます。もちろん、これら二つの考えは両立可能なもので、どちらをもそう思って生きているというのが、多くの現代人のものの見方かもしれません。けれども、私がいなくなれば、そのときにはあらゆるものが私とともに終わるといふ思いと、私がいなくなってもこの世は続くという思いとを比べてみますと、「私」というものの「重さ」に、どこか違いが感じられるのではないかと思います。／この違いの感じは人によって異なります。私がいなくなったあとでもまだ世界が続くことも、私がいなくなるとともにある意味で世界が終わるといふことも、どちらも同じように受け入れられる人は多いと思います。しかし、前者の思いの中では、私は世界の一要素であると感じられるのに対し、後者の思いの中では、ある意味で私がいなくなるとともにあるかのように感じられるのではないのでしょうか。『暗い』観念論の魅力は、この後者の思いのこの特徴にあるように、私には思われるのです。デカルト的観念論では、存在するのは私の心とその心の中に現れる観念だけ。つまり、私がいなくなるとともにあるかのように感じられています。このことが、『暗い』観念論が持つ、人を惹きつける力の源泉ではないかと私は思います。」

死ねば終わりというとき

終わりの意味を問わねばならないだろう

自分の終わりか世界の終わりか

けれども自分も世界も終わらないこともあるだろう

自分と世界がメビウスの輪のようにつながり

生と死の幾何学模様を描いているように

だれも死を知らないという

死は体験できないというのだ

生の時間と死の時間

けれども時間の境域を超えたとき

生と死は向き合った鏡のように

互いを照らし合っているのかもしれない

mediopos-330

2015.10.12



■リチャード・ネルソン『内なる島／ワタリガラスの贈りもの』（めるくまーる 1999.9）

「昨日と今日の体験を振り返って、代々の長老たちのよって練り上げられた大地に根ざす知恵の光に照らしたとき、一つ大切な教訓が得られる。二頭の鹿がやってきて、ぼくに二つの道を開いてくれた、一頭は獲物となり、おかげでぼくらは一つの体を共有することになった。もう一頭は手を触れさせてくれ、おかげでぼくらはあの瞬間を共有することになった。二つの出来事は正反対に見えるが、もしかしたらそっくり同じ一つのことなのかもしれない。どちらも同じ原則、同じ関係、同じ総合性の上に成り立っている。だから二つの出来事は実は同種の贈りものにちがいない。ノコユーコンの長老たちなら、彼ら一流の表現で、ぼくが恵みの二つの瞬間、つまり彼らの言う、`幸運、の瞬間に踏み込んだと説明するだろう。狩人であれ目撃者であれ、幸運の瞬間に分け入ることがあって初めて成果を上げられる。技術によるのでもなければ才知や賢さによるのでもない。自然には、そこから授かることができるだけで、勝手に奪い取れないものもあるのだ。」

世界は私の鏡  
与えたものを映し出す

笑顔を鏡に映すとき  
世界は微笑みかえす

怒りを鏡に映すとき  
世界は獣になって襲いかかる

世界は天秤  
釣り合わせるのが私の仕事

ふたつの贈りものが釣り合うとき  
幸福の瞬間がそこに訪れる

天と地は霊妙な形をして  
わたしのなかで結びあう





■ヨリス・ライエンダイク『こうして世界は誤解する／ジャーナリズムの現場で私が考えたこと』（英治出版 2011.12）

「ニュースの報道について、現状では改善すべき点は五つあるように思われる。第一に、ニュースを報道するメディアには視聴者に対し、自分たちが追っているのはあくまで「ニュース」であると注意を促す必要がある。（・・・）ジャーナリストには、あなたが「眼」にしているものは、「例外」であって、「通常のこと」ではありませんよと確実に視聴者に知らせる責任がある。（・・・）／第二に、非民主主義社会の報道に関する問題がある。例えば、シリアのようなところでは国が軍隊を所有しているわけではない。軍隊が国を所有しているのである。（・・・）／第三に、ジャーナリストは記事を書く際、ニュースとは世界を描写するものであると同時に世界に影響を与えるものでもあるという事実を織り込んだほうがいい。（・・・）／第四に、ニュースメディアは、問題ひとつに対し多数の見解があることを受け手に打ち明けた方がいい。コンセンサスなど存在しないということが唯一のコンセンサスであると、読者や視聴者にしっかり認識してもらう必要がある。（・・・）／五点目。市場本意のニュースメディアにはさまざまな偏りがある。これについては、改善へのヒントがあまりない。民主主義の歴史の中のどこかの時点で、ニュースは公共の財産ではなく、商品として扱われるようになった。商品は市場の中に存在し、市場では最も人気の高い商品が普及する。一方、公共の財産は市民社会の中に存在する。（・・・）／情報の選択について市民が投票にも似た決定を下す際に、「何を聞く必要があるか、ではなく、「何を聞きたいか、を基準にするなら、民主主義はどうやったら生き延びられる？ 非常に難しい問題である。ほしいと思う食べ物だけを与えられれば、人は肥満する。聞きたいと思うニュースだけを与えられれば、人は無知に、そして独善的になる。」

メディアからの栄養は  
バランス良くとりましょう

生きるための主食メニューを中心にして  
ニュースを食べるのはほどほどに

特売商品のニュースばかりを  
信用しすぎないように

食べたいものだけを食べていると  
栄養のバランスを崩してしまいます

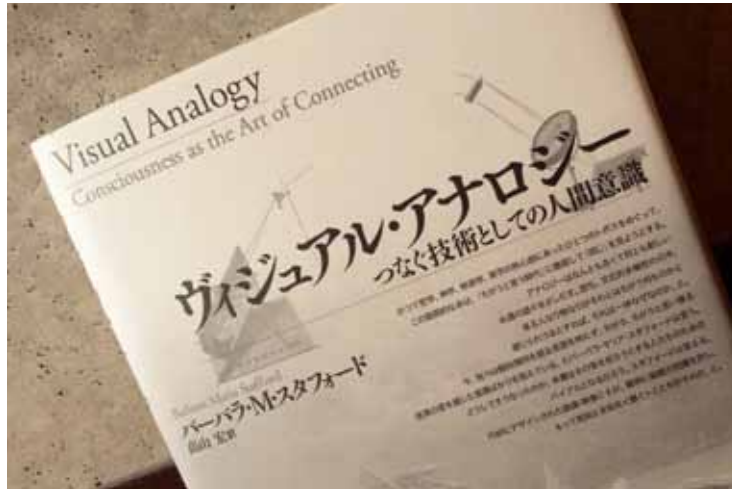
好き嫌いはあるでしょうが  
自分の嫌いなものがなにかをしておきたいもの

嫌いなものを食べないかわりに  
代わりの栄養分を補給しなくてははいけません

好きな情報だけを好きな人とだけ共有してしまうと  
同じ病気にかかる可能性が高くなります

メディアからの栄養は  
バランス良くとりましょう

毒になりそうなものは  
解毒剤も用意しておきましょう



■バーバラ・M・スタフォード『ヴィジュアル・アナロジー／つなぐ技術としての人間意識』（産業図書 2006.7）

「なぜアナロジーなのか。今日、名を聞くだに、激しい侮蔑は引き起こさぬまでも、ごちゃごちゃになった自由連想の果ての錯乱三昧という感じで、少なくとも時代錯誤だと誰しも思う。最近もウンベルト・エーコがこれを「ヘルメスの記号論」と呼んで馬鹿にしているが、森羅万象のあらゆるものを別のあらゆるものと無批判に繋ぎ合わせる軽挙に出るカバラ的強迫観念、パラノイアの軽信というわけである。一方、初期イオニア学派に鼓舞されていたプラトンにとっては、アナロジーは「この上なく美しき紐帯」なのであった。／「アナログア」、もしくは「アナログス」は「適性の比率に従って」、「同種の途に従って」というのが原義である。従って「アナログン」は見かけ上似ていない複数のものとの間にある均衡、もしくは相似性のことで、火と土を繋げるものとエレアのパルメニデスが言い、愛と憎しみを一緒にするものとエンペドクレスが言い、可視圏と不可視圏を結ぶものとアナクサゴラスが言う、張力ある調和のごときものである。／プラトン、アリストテレス、ネオプラトニストたち、トマス・アキナス、カント、ミル、ニーチェ、ハイデガー、そして後期ヴィトゲンシュタインとともに、この統一の弾力ある結び目は、数字の等距離や論理的な相称などよりはるかに大きな認識論の意味合いを帯びるにいった。それは可視と不可視を架橋し、既知と未知を架橋しようとする弁証法的形式として現れた。プロポーションナリティ、というか二つのプロポーションが似ているとか双方向的だとかいうのは、単なるアイデンティティ、つまりを完全に他で説明し切れるというイリュージョンとははっきり違う。」

「洗練されたアナロジー理論がないと、あるのは差異の否定弁証法ばかりで、行き着くところ同化のふりか、不動の我への固執と引き籠もりかの、いずれにせよ突破不能の袋小路であって、意味あるコミュニケーションの生じる可能性はない。アナロジー化の良いところは、遠くの人々、他の時代、あるいは、現代のさまざまなコンテクストさえ、我々の世界の一部にしてくれる点である。過去のこと、遠いもの、異なるものを近似のものとすることによってのみ、それは我々に理解できるようになる。」

素手で垂直な岩山に登ることが  
あまりに困難であるように  
まったく異質のものは  
理解を拒まれている  
岩にハーケンを打ち込むことさえ  
できないようなものだ

似ているということは  
違うということだが  
違いをわかるためには  
壁にハーケンを打ち込むように  
似ているところから  
はじめなければならない

どんなに聳え立つ岩山も  
一步一步登ることはできるのだ  
ときに岩壁は激しく崩れ  
死をも招き寄せることもあるけれど  
見えないものを見えるものにするためには  
激しいまでの違いさえも越えていかなければならない





■石岡良治『視覚文化「超」講義』（フィルムアート社 2014.6）

■石岡良治『「超」批評視覚文化×マンガ』（青土社 2015.4）

（石岡良治×國分功一郎 巻末特別対談より）

「石岡 かつての教養は無効になっていて、でも教養主義の「無意味な障壁」は残っている。その障壁を単に壊すとか再構築するというより、「眼差し」を複数化することでまだまだ見えてくるものがあるという直感があるんだよね。」

「石岡 最近千葉雅也さんが『動きすぎはいけない』で「現在は接続過多の時代だから、然るべきところで切断しよう」と提唱したよね。これは情報社会に対する強い倫理的な主張も伴っていて、世の中が接続過多に疲れている時代に、シンプルで有効な処方箋を提示したと思う。僕自身、生活のある側面では非常に柔軟だけど、別の側面では非常に頑固だという場合がある。人間の柔軟性と頑固さの配分はそれぞれ異なっているよね。（・・・）／講義では主題的には展開できなかったけど、情報過多の時代を多面的に捉えようとするなら、知覚や情動などの働きについて、あらゆる側面から考察する必要があると思っている。様々なカルチャーの分析は、そうした考察のひとつでもあって、例えばめまぐるしい情報を前にした時の「注意」や「注意散漫」といった主題は、もっと展開していく必要があると思っている。接続や切断の問題系もそこから捉えることができるし、柔軟さと頑固さの配分といった経験的な処方にも関わるからね。一般に、情報社会に対する処方箋は、常に世代によって違う倫理が提唱されると思っている。どうしても若い世代は速さを称揚して、歳をとってついていけなくなると、今度はゆるやかさを称揚に向かうよね。でも僕は「加速をやめて減速する」というのは、アクセルとブレーキしか想定しない不十分な構図だと思う。僕は情報の消費モデルについては、速度を多様化することの方が重要だと思っている。例えば、超加速だって批評的な介入になりうる。（・・・）その次に来る問題として、文化に関わる人はどうしても現在中心主義に対してブレーキをかける、あるいは過去を持ち込むことで批評を確保しようとするのがよくある戦略なんだけど、それに対して僕は『B T T F（バック・トゥ・ザ・フューチャー）』のモデルを考えているんだよね。『B T T F』のように、過去・現在・未来総体、つまり批評の契機としての未来を含み込んだタイムスケールにおいて、加速・減速の多数の軸をたくさん生み出す必要がある。」

現在は常に更新される  
過去はただの過去ではない  
未来はただの未来ではない

知覚は変化する  
速度は変化する  
情報は変化する

知覚の波長を複数化せよ  
速度のギアを複数化せよ  
情報の密度を複数化せよ

# mediopos-334

2015.10.16



青よ  
空の青よ  
海の青よ  
心の青よ

青はどこにあるのか  
青はどこまでも透明なまま  
それととらえることができない

青は光なのか闇なのか  
青は光と闇の矛盾のままに  
私の精神のなかに息づいている

## ■小町谷朝生『色の不思議世界』（原書房 2011.9）

「青色は眼にとって手ごわい相手である。とにかく青は、眼の本質作用がもっとも必要とするらしい精確な焦点づけを頭から拒絶する色だからである。明るい青空の色も、海の色も、彼らの青色は、たとえ限度いっぱい濃くても、透明性を決して捨てない。そのためにそれらの色に対して視線は、細かい言い方をすれば、焦点づけしないで通過する。一方、絵の具の明るい青色の場合は、通常不透明性をあらかじめ備えるから、視線が通過する機会はず端からない。表層から反射される色によって青色を見ているのであるが、あえて言えば、その青色は青なることによって透明と見えるのだらう。しかし、そのように見えているとしても、不透明なその青色は記憶視の中に生息している青であろう。」

「人間の眼は日常作用では透明性をもつだけの青色を相手にしないように開発されてきた。絵の具のような人道的青色に不透明性が課せられてきたのは、その反省からである。サインペンのように、全部の色が透明色である性質の色材は、そのこと自体がごく後開発の色だと告白している。すなわち、進化の過程において、視対象として青は、「進め」ではなく、「避けて通る」の色であったわけである。／それと言うのは、簡単にいえば青色は透明性をもつかぎりにおいて、見ているものの形をぼかすのが性質であるからだ。青色は、脳の形一色関連の知覚方針を、唯一破る色だ。形を定めにくいことによって、日常の現場から逃れ去る。その逃れが人間密着型の他の色相と異なる色域の性質を与え、人間は客観性とか理知とかに結びつく信頼感を青色に見出すことになった。それを資本に青色は、精神に直接語りかけられる資格をも色としてもったのである。」

「そのように視の要求を裏切る青の透明性とは、青色が光の性質を保有する色だから、と言ってもよいことを表しているだらう。アリストテレスにより闇にもっとも近い性質とされた青は、光も潜在している。すなわち、青は光と闇の両義のなかに自分の立場をもつようにされている色ということで、青は黄色とともに矛盾の存在化をあらわにしているのである。」



■長谷川權『芭蕉の風雅／あるいは虚と実について』（筑摩書房 2015.10）

「現実の世界のさまざまなかごとは、風雅の世界から眺めればどれも素材にすぎない。そこから取捨選択をして文学に仕立てる。必要であれば、じっさいはなかったこともあったことのように作りあげる。芭蕉にとってこれが「虚に居て実をおこなふ」ということだった。思えば、現実のできごとをそのまま写しさえすれば文学になると教える近代の単純な写実主義（リアリズム）や人間世界を暖かく見守る人道主義（ヒューマニズム）とは何と遠く隔たった文学のあり方だろうか。」

「芭蕉が「難し」という「実に居て虚にあそぶ」とはどういうことか。それは現実の世界から脱け出さないまま（実に居て）、風雅の世界に遊ぶ（虚にあそぶ）ということである。そのような人は現実の世界に心を置いたままで歌仙を巻こうとする。しかし芭蕉からみれば、それは歌仙を巻く人としては「難し」、つまり失格であった。／（・・・）この世には人間が生きている現実の世界と、それとは別の風雅の世界がある。芭蕉は現実の世界（実、俗）を脱却して風雅の世界（風狂、虚、高悟）を打ち立て、そこから逆に現実の世界を眺めようとした。歌仙に関していえば、歌仙の捌き手、それにできればほかの連衆も風雅の世界の人でなければならなかった。」

「昭和戦争の敗戦後、日本の民主化とともに俳句は大衆化の時代に入り、今や数の上では未曾有の盛況を呈している。しかし、その代償として失ったものも少なくない。俳句の大衆化、誰でも俳句が詠めるということは「実に居て虚にあそぶ」人々が大量に出現するというにほかならないからである。この圧倒的な数の減少が、「虚に居て実をおこなふ」べき俳句の質を変えてゆくことになる。／まさに「実に居て虚にあそぶ事は難し」。現代は俳句にとってじつは困難な時代なのである。はたしてこのような時代に芭蕉が体現した風雅の世界はどのような姿をとるのか。晩年の芭蕉を苦しめた問題はそのまま現代の俳句が抱える問題でもある。」

見えるものを実とせよ  
だが実に居ることは  
真に見えているのではないのだ

見えぬものを虚とせよ  
虚に居ることによって  
見えるものが真に見えてくるのだ

実は仮面である  
虚は見えない顔  
観る者は虚に居らねばならぬ

物たちは実に閉じ込められている  
開くには虚に居らねばならぬ  
そのとき仮面は脱ぎすてられる

遊べよ遊べ 虚に遊べ  
遊べば 実も姿を変じ  
風雅の姿で舞い踊る



■イヴァン・イリイチ『コンヴィヴィアリティのための道具』（ちくま学芸文庫 2015.10）

「すぐれて現代的でしかも産業に支配されていない未来社会についての理論を定式化するには、自然な規模と限界を認識することが必要だ。この限界内においてのみ機械は奴隷の代わりをすることができるのだし、この限界をこえれば機械は新たな種類の奴隷制をもたらすということを、私たちは認めなければならない。教育が人々を人工的環境に適応させることができるのは、この限界内だけのことにすぎない。この限界をこえれば、社会の全般的な校舎化・病棟化・獄舎化が現れる。政治が、エネルギーや情報の社会への平等な投入に関わるというよりはむしろ、最大限の産業産出物の分配に関わるのが当然とされるのも、この限界内のことにすぎない。いったんこういう限界が認識されると、人々と道具と新しい共同性との間の三者関係をはっきりさせることが可能になる。現代の科学技術が管理する人々にではなく、政治的に相互に結びついた個人に仕えるような社会、それを私は「自立共生的（コンヴィヴィアル）、と呼びたい。」

ひとりでなくては  
考えることはできない  
けれどもひとりでは  
生きてはゆけない

ひとはみんなになり  
みんなが制度になる  
そのときひとは  
どこまでも疎外されてしまう

なぜ学ぼうとするとき  
学校化されてしまうのだろう  
教師と生徒が生まれ  
学ぶことが制度になる

なぜ癒やそうとするとき  
病院化されてしまうのだろう  
医者と患者が生まれ  
病名のもとに分類される

なぜ罪を罰そうとするとき  
獄舎化されてしまうのだろう  
法律家と犯罪者が生まれ  
法の名のもとに拘束をうける

みんなが自分のひとりを  
疎外し奴隷にしてしまうことなく  
ひとりひとりとして  
生きてゆけますように





## ■森田真生『数学する身体』（新潮社 2015.10）

「岡潔もまた、数学研究を契機として、心の究明へと向かっていった。ただし、方法はチューリングのそれとは大きく違う。／チューリングが、心を作ることによって心を理解しようとしたとすれば、岡の方は心になることによって心を知ろうとした。チューリングが数学を道具として心の探究に向かったとすれば、岡にとって数学は、心の世界の奥深くへと分け入る行為そのものであった。道元にとって禅がそうであったように、また芭蕉にとって俳諧がそうであったように、彼にとって数学は、それ自体が一つの道だったのだ。／心は玉ねぎのように、手で持つことができるような、動かぬ実体ではないのである。知ろう、わかろうとするこちらの姿勢が、そのまま知りたい、わかりたい心のあり方を変える。心を知ろうとするときに、知りたいこちらと、知られるあちらを、分けることなどできないのである。／岡は心を論じるときに、野菜の皮より、種子を語った。種子は育ち、大きくなる。その変容する力に種子の生命がある。玉ねぎを生んだ種子。その種子を包み込む土壌。玉ねぎの本質はその空間的「中心」よりも、むしろその外、その過去の方にある。／心の外。心の過去。物理的な肉体の中に閉じ込められない、心の本来の広がりを取り戻そうと、岡は「情緒」という言葉に、新たな意味を吹き込もうとしたのだ。」

「動かぬ芯としての心、変わらぬ中心としての数学などというものは幻想である。心は変容し続けるものであり、数学もまた動き続けるものだからだ。肝心なのは、動かぬ中心ではなくて、絶えず動き続ける生成の過程そのものである。／だからこそ、心を知るためにはまず心に「なる」こと、数学を知るためにはまず数学「する」こと。そこから始めるしかないのである。／数学と数学する身体とは、これからも互いに互いを編みながら、私たちの知らない新たな風景を、生み出し続けることになるだろう。」

心を知るには  
心にならねばならない  
そして心の  
変容し続ける広がり  
に遊ばねばならない

体を知るには  
体にならねばならない  
そして体の  
変容し続ける広がり  
に遊ばねばならない

物を知るには  
物にならねばならない  
そして物の  
変容し続ける広がり  
に遊ばねばならない

数を知るには  
数にならねばならない  
そして数の  
変容し続ける広がり  
に遊ばねばならない

私を知るには  
私にならねばならない  
そして私の  
変容し続ける広がり  
に遊ばねばならない



# mediopos-338

2015.10.20



■鷺田清一『「聴く」この力／臨床哲学試論』（TBSブリタニカ 1999.7）

「ソフィア（sophia）は acquaintance with a thing と英語で表現されることもあるらしいが、これはかつて小林秀雄が「かんがふ」ということばによせて述べたこととも呼応する。未完に終わったものの、長大なベルクソン論を雑誌に書きつづった小林秀雄は、本居宣長にふれた小さい文章のなかで、「考える」ということばについて、つぎのように書いていた。

彼の説によれば、「かんがふ」は、「かむかふ」の音便で、もともと、むかえるという言葉なのである。「かれとこれとを、比較へて思ひめぐらす意」と解する。それなら、私が物を考える基本的な形では、「私」と「物」とが「あひむかふ」という意になろう。「むかふ」の「む」は身であり、「かふ」は交うであると解していいなら、考えるとは、物に対する単に知的な働きではなく、物と親身に交わる事だ。物を外から知るのではなく、物を身に感じて生きる、そういう経験をいう。実際、宣長は、そういう意味合いで、一と筋に考えた。彼が所謂「世の物しり」をしきりに嫌いだと言っているのも、彼の学問の建前からすると、物しりは、まるで考えるという事をしていないという事になるからだろう。（「考えるという事」）

物と親身に交わること、物を外から知るのではなく身に感じて生きること——これはもう、ここで小林が論じようとしているベルクソン哲学における「哲学的直観」の定義とほとんど重なる。あるいは、ベルクソン的に考えて、哲学することそのものである。「直観」を、ベルクソンは、「対象の内部に入り込み、対象のもつユニークなもの、したがって表現しえないものと合一するところの共感」と定義している。「直観」はものそのものにじかに触れること、つまりものの内側からそれを知ることである。これに対立するのは、実在を記号に翻訳する操作としての「分析」である。「分析」は、ものの影についての知、ものともとの関係をめぐる知、つまりは外からの認識にすぎない。おなじように、対象への知の二様のかかわりかたを対比した同時代の人物に、ラディカル・エンピリシズム（根源的経験論）の哲学者、ウィリアム・ジェイムズがいる。かれは、身で覚えていることとしての knowledge by acquaintance（熟知）を、なにものかについての概念的知識である knowledge-about（～にかんする知識）に鋭く対立させたのだった。／そういう「かむかふ」は、物の経験においてではなく、語らいというかたちで他者の面前に立つときには、下りることのできない張りつめた場にじぶんを置くことを意味する。なぜなら他者に働きかけることだけでなく、他者からことばを差し向けられたときのそのことばの受けとりかたもまたまぎれもない他者への語りかけのひとつとして、意味をもつからである。他人と会話をしているときのまなざしの震えやためらい、あるいはことばの選択や微調整のためにつかうエネルギーを思い出せばよい。場のあらゆる契機を勘定に入れ、相手の表情のかすかな変化もみのがさない、そういう張りつめた空気の中で、たがいが深く相手のうちに入り込むといった経験ももちろんあるだろう。が、身を、そしてことばを交わすより以上に、交わすことの限界に突き当たることのほうが多い。凍結したことばを凍結したまま受けとる、それ意外になしようなない語らいである。相手がまるで石のように感じられる瞬間である。このとき語るなかで語ることの不可能なものに「哲学」もまたふれる。語りえないものを言語で表現するという、まるで詩人のような仕事に「哲学」がかぎりなく近接するのだ。」

学ぶことは考えること

知を愛するならば  
知ることを超えてゆけ

知るために分けるとき  
愛は不在になる

考えることは愛すること

地を愛するならば地となり  
水を愛するならば水となり

火を愛するならば火となり  
風を愛するならば風となり

語り得ないものへ  
語り得ないものとともに

言葉をポエジーにするために



## ■『岡潔／日本のごころ』（日本図書センター 1997.12）

「数学は人の心からとって知性の文字板に表現する学問・学術の一種である。したがって心の中にある数学を開発することが数学教育の任務である。しかし、今の教育を見ると、数学というものをわかって教えているのだおるかと思わずにおれない。だいたい、数というものが心の中でわかっておればこそ、数学が教えられるのである。幼児の発育を見ても、数がわかるのは時空や自然がわかるより先である。いくら造化でも、いや造化だから尚更、その逆はやれないだろう。数学が何かは私にもよくはわからないが、心の中にその元があることは確かであって、逆に自然から教わるべきものではないのである。／してみると、自然によりかかって数学を理解させるやり方は間違っている。黒板に移した図式や数式は自分ではなくて、自分と対立する自然物になるということのみな知らないでいるらしい。色つきのチョークやグラフなど、色彩を使って教えるのもなるべくやめたほうがよい。相当に子供の感覚が動かされ、情緒の表面に荒い波が立つからである。本当は机に向かって、本を見ながら、演算しながら勉強するのをやめて、散歩しながら心の入り口でやるとよいのである。事実、古来の代数学者はみなそれでやっている。／黒板とか、鉛筆とか、紙とかいう外物に頼っていると、計算しなくては正しさがわからないとなる。これでは闇夜の中をちょうちんもなしに歩いているのと同じで、いつまでたっても闇夜から抜けられないだけでなく、闇は深くなる一方である。しかも昼というものを知らないから、それが闇夜であることに気づかない。／しかし、本当の数学は黒板に書かれた文字を普通の目玉で見てやるのではなく、自分の心の中にあるものを心の目でみてやるのである。これを君子の数学という。この方法でちゃんとやれば、白昼の光の中に住むことができる。自分で自分がわかるということなのだから、計算などというまだるっこいことをしなくても、直観（感官、特に視角のそれを通さないもの、即ち純粹直観）でわかるのである。」

心のなかにあるものを  
心のなかを見つけることは  
みずから灯りを灯すこと

灯りが灯れば  
それまで闇に見えていた世界が  
光に満ちていることに気づく

心のなかにあるものを  
心の外でわかろうとしても  
闇に明かりを灯すことはできない

ただ目を開くだけで  
光を得ることができることに気づけず  
闇はますます深くなるばかり

mediopos-340

2015.10.22



■石川美子『ロラン・バルト／言語を愛し恐れつづけた批評家』（中公新書 2015.9）

「日本に発つ前にバルトが巻き込まれていた新旧論争において、彼が批判していたのは、作品の意味を作者の人生や社会背景にもとめる批評であり、作品にただひとつの意味や真実をもとめてそれを標榜する批評であった。「ただひとつの意味」への抵抗から、バルトは意味の複数性をあつかう「文学の科学」を夢みていたのだった。そうして、「ただひとつの意味」に対する苦々しい思いと、「意味の複数性」をもとめる望みとをもって、日本をおとずれたのである。だが日本でバルトは気づく。「ただひとつの意味」とたたかうには、意味を複数化することにほかに、もうひとつの可能性があるということに。／東京の中心は皇居であり、そこには誰も入ることができない。フランスでは町の中心は教会であり、人びとが集まってくる濃密な中心である。東京では中心は空虚になっているのではないかとバルトは驚く。あるいは料理の場合、「すきやき」は、いったん始められると客の目のまえで休みなく作られてゆく。フランスのコース料理にはメインの皿があるが、すきやきには中心がない。また揚げ物は、フランスではまわりに分厚い衣のついた重ったるい食べ物であるが、日本の「点ぶら」は中心の具よりも軽やかな衣のほうを食べているかのようである。このように日本でさまざまな「空虚な中心」を目にしたバルトは、西欧的な意味の深みから解放される幸福感を味わったのだった。」

「文楽を観に行ったときには、舞台が人形と人形遣いと太夫という三つに切り離されていることに驚く。それらの三つのエクリチュールを観客は同時に読み取っているということに。（・・・）／文楽の人形を見ながら、バルトは西欧の演劇と比較して、「身体」のことを考えた。（・・・）／バルトは、西欧演劇において記者が過度の演技で感情（魂）を押しつけることをつねに嫌悪していた。だが文楽の人形はそうではない。人間の身体を模倣して見せているのではなく、身体の観念というものを、はかなく、慎み深く、語っているのである。」

作品がひとつの意味に  
縛られてはいないように  
人もひとつの意味に  
縛られてはいない

けれども私が  
ひとつの意味に縛られるとき  
言葉はポエジーを失い  
身体は世界に固定されてしまう

私という現象は  
くるくると変化しながら  
多様な光を受け  
多様な光を放ち続けている  
自在なインドラの網なのだ



眼を閉じて眼を開け  
見えぬものを観せる身体と  
見えぬものを観る身体とが  
無の舞台で交わり踊るのを観よ

耳を閉じて耳を開け  
聞こえぬものを聴かせる身体と  
聞こえぬものを聴く身体とが  
無の舞台で無の音を交響させるのを聴け

私を閉じて私を開け  
私でない私へ向かう身体と  
私という他者を遊ぶ身体とが  
無の舞台で花と化すがごとく舞え

## ■松岡心平『中世芸能講義／「勸進」「天皇」「連歌」「禪』(講談社学術文庫 2015.5)

「後期の世阿弥は自身が禪の世界に深く入っていくなかで、禪の身体を能の身体に取り入れていくことがあったのではないか。そして、これによって日本の芸能は大きく変わっていく。つまり、あまり身体を動かさない芸、腰を中心とする芸に大きく変化していった、日本の舞踏家の身体が、世阿弥がめざした身体によって後のちまで規定されてしまうといったことがおこる。」

「世阿弥は『遊楽習道風見』のなかで、次のようにいっています。

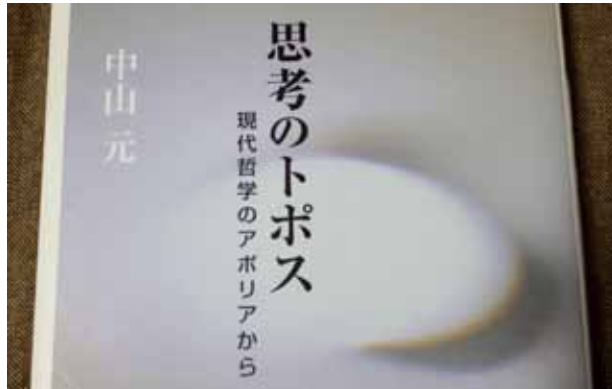
およそ風月延年のかざり、花鳥遊景の曲、種々なり。四季折々の時節により、花葉・雪月・山海・草花・有生・非生に至るまで、万物の出生をなす器は天下なり。この万物を遊楽の景体として、一心を天下の器になして、廣大無風の空道に安器して、是得遊楽の妙花に至るべきことを思ふべし。

能舞台は何もない舞台で、視覚的な装置はほとんどない。作物がときどき置かれることはあるけれども、それも大した舞台装置ではない。そういう何もなかったところで観客がいかにして演者の肉体を通していろいろな情景を想像していくかが能の勝負になるわけですが、そのところを世阿弥はこの時点ではっきりつかんでいます。

とくに「万物を遊楽の景体として、一心を天下の器になして、廣大無風の空道に安器して」という一文において、宇宙と通底するような深層の身体（意識）のレベルまで降りたところで、その身体（意識）からの発信によって観客に森羅万象を感じとらせることが狙われていると考えられます。

ある種、無意識の層というか、演者の内面に意識が集中し降りていって、日常的でない精神の層に降りていったところで、そのような身体が観客を触発して、舞台に見えもしない風景をみせるようなことが可能になるのだと世阿弥は考えていて、しかも、先の文では「一身感力の心根なり」と捉えています。それは身体に深く内部集中していく力とっていいと思いますが、そういう身体を世阿弥はつかまえているわけです。」





■中山元『思考のトポス／現代哲学のアポリアから』（新曜社 2006.6）

「目はものを見るが、目は目そのものを見ることはできない。しかも見られたものはぼくの視野を形成するが、ウィトゲンシュタインが指摘するように、「視野における何ものも、それが目によって見られているということは推論されない」。だからぼくたちが見ているものは実は存在するものとは別のものかもしれないが、それを確かめることはできないのだ。／あるいはそれが目の構造そのものによるものではない場合にも、ぼくたちはしばしば盲目になる。ウィトゲンシュタインがしばしば例にあげているのは、兎にもあひるにも見える絵であり、ぼくたちはそれを兎として見るときは、あひるは見えない。あひるを見ているときは兎は見えない。どちらかに解釈して、兎「として」見るか、あひる「として」見るしかないのである。（・・・）／見えないというのは、このように生理学的な要因だけによるものではない。そこにありえないとおもってしまうと、そこにあって「見えない」のである。ポーの「盗まれた手紙」がその好例を示してくれる。大臣が秘匿しなければならない手紙は、状差しに別の手紙のようにして差ししてあるのに、警察がいくら探しても見つからない。そんなところにあるはずがないからだ。」

「ぼくたちにとって経験に先立つもの、アプリオリであるものは、「見えない」ということなのだ。ぼくたちのものの見方、思考方法、語り方などは、それまでの制度によって支えられ、こうした制度のうちから誕生してきた。それだけに、ぼくたちの思考を支える枠組みになっているものは、ぼくたちには透明になっていて、とても見にくいものである。過去の時代の思考方法は、歴史的な分析方法で考察することはできる。しかしこうした過去と比較する際の基準として機能する現代の思考方法は、ぼくたちには自明であり、空気のように自然なものであるだけに、かえって意識化し、見るのが困難なのである。」

月を指して月を見せようと思っても  
指しか見ないでいるように  
見ていると思っけていても見えていないものがある

あたりまえになりすぎていると  
呼吸するときの空気のように  
意識することはとてもむずかしい

けれども目は目そのものを見るができないとしても  
見えていないことを考えてみることはできる

あひるとうさぎを同時に見ることはできないとしても  
そのどちらかしか見えないことを理解することはできる

みずからを見ることがむずかしいとしても  
そのむずかしさの前で苦闘することはできるだろう

まず指されている月そのものを見ようとするのだ  
見えていないということを考えてみようとするのだ





■ルドルフ・シュタイナー『アントロポゾフィーの人間認識と医学』（ルネッサンス・アイ 2015.7）  
（「アントロポゾフィーの霊学に基づく治療法を理解するための原則／1923年8月23日ペンマイン  
マウル（イギリス）にて より）

「人間の中には全宇宙の過程のある種の集積、小宇宙的な集約が存在しますが、人体外の物理的、化学的なプロセスは人体の中に限っては、決して人体外の自然界で進行していたような形式では存在しません。人間が地球の物質を取り込みますが、それらは単なる静的な物質ではなく、本来常に自然界のプロセス、自然界の出来事に満たされています。ある物質は単に外見上は、まるでそこに孤立した静止物のように見えます。しかし、実際はあらゆるものがその中で営々と活動しています。そして人間が自然界で化学的、物理的に演じられているその営みと活動を体内に取り込めば、それはただちに変化し、別のものになります。／自然界のプロセスから人体の中に入ったこの変性物を理解するには、まず実際に正しく人間を観察しなければなりません。しかし、現代の自然科学が本質的に帰結するところは、ひとえにすべてが物理的、化学的なものだけに依拠しようとする事なので、その領域で本質的に人間的とされるものは、肉体の中で案じられているものとなっています。とはいえ、人体の中で生起しているものは何ひとつとしてエーテル体、アストラル体と自我の活動の影響下にはないものはありません。しかし、自然科学はこの自我の活動、アストラル的なプロセス、エーテル的な営みを全く考慮しないので、本質的に人間を解明することができません。したがって自然科学は本質的に人間をより内的に観察できないので、あらためて体外の化学的、物理的プロセスは人体の中でどのように働くのか、健康な人と病気の人とではどう作用が異なるのかを明らかにしなければなりません。」

健康とは何だろうか  
病気とは何だろうか

自然界のなかの働きだけをみても  
人間のなかの働きは理解できない

自然界のなかでのさまざまは  
人間のなかでは異なった働きをするからだ

実験室のなかで働く作用も  
人間のなかでは異なった働きをする

実験室のなかには人間はいない  
エーテル体もアストラル体も自我も存在しない

人間を理解しようとするならば  
自然界の働きが人間のなかで  
どのように働くのかを理解しなければならない  
のだ

善とは何だろうか  
悪とは何だろうか

人間を理解しようとするならば  
宇宙の均衡が人間のなかで  
どのように働くのかを理解しなければならない

みずからの行く道を求めるならば  
宇宙の均衡をみずからの自由において  
どのように導くかを求めなければならない



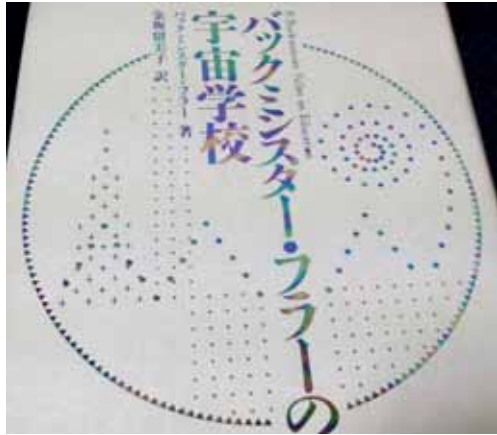
■松本健一『海岸線の歴史』（ミシマ社 2009.5）

「日本人の意識が海岸線から遠のいている。海を思い浮かべるとき、それはどこまでが日本の領海であるのかという、非常に限定的、つまり国際的な問題意識に固定されてしまっている。そうすると、日本人のなかに伝統的に存在した「海のなかにある日本」という原感情は意味をもたなくなる、という非常に大きな文化史的な転形期に、わたしたちは現在立たされている。／（…近代の国際法にもとづく領海概念や、近年浮上してきた大陸棚法案とは、もう少し異なる発想を海洋に対して持たなければならないのではないと思われる。海にあるものは工業や産業の資源であるという発想は、海洋は貿易のみならず工業や産業、とどのつまり近代文明に有用であるという発想によるものだ。／だが、これまでの近代の工業や産業、つまり近代文明の文脈のなかでのみ海洋を解釈すると、新しい資源が発見されると、海洋の意味が広がったように見えるのであるが、思考のパラダイム（枠組み）からすると、やはり資源ナショナリズムという、より観点の狭い見方になってしまうのである。今日私たちが海を取り戻すという発想は、私たち人類は海から生まれているということを念頭に置きつつ、文明というのは工業化や産業化がすべてなのか、とその文明の意味を問いなおし、自然のなかに人間の身体も社会も一度還元するという文化的発想に戻らなければいけない。それは、私たち日本の古い文化を考え直すことでもあるし、また現在海辺に住み、ばあいによってはそこで祈った古き時代の人びとの考えかたが近代文明を超えるパラダイムをかんがえるさい、あらためて大きな意味をもつ、ということであろう。／つまり、海岸線にどのような変化が起きてきたか、という歴史的視点を手に入れると、近代文明が人間の生き方と社会のありかたにもたらした変化の意味が非常によく見えてくるのではないか。そうして、日本のみならず近代の人間と社会が海岸線を失ったことの意味を、わたしたちは改めて見究めることができるのではないだろうか。」

海岸線はいま人の心のなかに  
どのような姿で描かれているのだろうか  
その線の変化が意味するもの  
意味していくであろうものは何だろうか

日本という形はいま人の心のなかに  
どのような姿で描かれているのだろうか  
その形の変化が意味するもの  
意味していくであろうものは何だろうか

私という輪郭はいま人の心のなかに  
どのような姿で描かれているのだろうか  
その輪郭の変化が意味するもの  
意味していくであろうものは何だろうか



■バックミンスター・フラー『バックミンスター・フラーの宇宙学校』（めるくまーる 1987.10）

「わたしはものごとを考えるとき、よく二通りの手段をもちいる。それは、過去の偏見やパターンにとらわれないための重要な方法である。／そのひとつは、われわれが強烈に条件づけられた反射作用をもっていることを、とまかく無条件に認識することだ。たとえば「上」と「下」ということばがある。だれもがあらためて考えることなく使っているこれらのことばは、われわれは無限に横方向にひろがる平らな世界に住んでいるという、何百年もの歴史をもつ「誤った概念、に都合がいいように作りだされたものである。ひとつの平面に垂直なすべての直線は互いに平行でなければならないから、意識は二方向、つまり「上」と「下」にしか行きようがなかった。／このふたつのことばは、宇宙のなかで、太陽のまわりを時速六万マイルの速さで回っているわが球形の惑星には、何の関係もない。宇宙には「上」も「下」もないのだ。」

「第二の考えとは「シナジー」に関するものだ。それは旧式の思考パターンから自由になる手助けをしてくれる。しかし、このことばを知っている人はほとんどいない。シナジーとは、「それぞれの部分の働きを個別で見ているは予測もつかない、全システムの働き」を意味する。(・・・)「シナジー」にはさまざまなレベルがある。原子から、分子の働きを予測することはできない。ひとつの分子から、生物学的な原形質の働きを予測することはできない。原形質それ自体から、われわれの惑星のすべての生命体の、エネルギー交換をしながら再生産していくエコロジー的な連動関係を予測することはできない。／マイクロからマクロへ向かうにしたがい、より包括的になっていく宇宙のすがたは、ある段階ひとつをとりだして予測できるものではない。宇宙とは、たくさんシナジーの集合体が生み出すシナジーなのである。「シナジー」が導く必然的な結果として、すでにわかっている統一体としての働きに、すでにわかっているいくつかの部分の働きを加えることによって、ほかの部分とそれらの動きの特性を知ることが可能になる。何が起きているかをほんとうに理解するためには、われわれは部分から出発することを放棄しなければならない。そのかわりわれわれは、全体から個々の特性へと働きかけなければならないのである。」

宇宙的に見るということは  
地上をも自由に見るということだ

自由に思考するということは  
私を条件づけているものから  
自由になるということだ

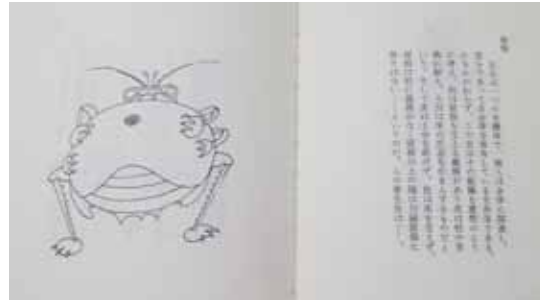
気づかないところで  
私はみずからを縛り付けている  
ほんとうはそうでなくてもいいのに  
そうでなくてはならないと思込んでいる

部分と全体は交響しなければならない  
部分のなかにも全体は響いているのだ  
一音のなかに宇宙が奏でられているように

真に私が自由に生きるということとは  
宇宙を自由に交響することなのだ

# mediopos-346

2015.10.28



## ■辻まこと『虫類図譜（全）』（ちくま文庫 1996.12）

（傲慢）「社会は一つの有機体で、個人は全体に関連し、部分であって且全体を保有している生命体である。にもかかわらず、この虫はその組織を建物のように考え、柱は屋根を支える義務があり床は柱の苦痛に耐え、柱は屋根を支える義務があり床は柱の苦痛に耐え、土台は床の圧迫をがまんするものだという。そして床は土台を助けず、柱は床を支えず、屋根は柱に義務がなく屋根の上の俺は勿論屋根に借りはない……というのだ。この寄生虫は……。」

天は人の上に人をつくらなかったし  
人の下に人をつくらなかったが  
人は人の上に人をつくりだし  
人の下に人をつくりだした

天は教える人と教えられる人をつくらなかったが  
人は教える人と教えられる人をつくりだした

天は富める人と貧しき人をつくらなかったが  
人は富める人と貧しき人をつくりだした

天は美しき人と醜き人をつくらなかったが  
人は美しき人と醜き人をつくりだした

天はさまざまな違いをつくりだしたが  
その違いを上下に置き換えはしなかった

違いは支え合い生かし合うためにもあるのだが  
人はそれを排他と依存の奇妙な構造物にした

天は人の上に人をつくらなかったし  
人の下に人をつくらなかったが  
人は奇妙なバベルの建物を建てて  
不思議な信仰で上を崇め下を貶めている



# mediopos-347

2015.10.29



■シモーヌ・ヴェイユ『前キリスト教的直観』（法政大学出版局 2011.10）

（ピタゴラス派の学説について）

「ピタゴラス派の学説は、わたしたち現代人にとって、ギリシア文明の偉大な神秘である。この思想はいたるところに見出される。ほぼすべての詩、ほぼすべての科学——わけでもアリストテレスが純粹にピタゴラス派の人とみなしているプラトン、音楽、建築、彫刻に行き渡っている。また算術、天文学、力学、生物学といった学問の源もこの思想に由来し、しかもこれらの学問は根源的に現代のそれと同じである。プラトンの政治思想も、この思想に由来している。つまり、ピタゴラス派の思想は、世俗の生をくまなく包み込んでいるのである。この時代には、いたるところで世俗の生と超自然的な生は調和し、一致していた。今日では両者はすっかり分離してしまっているが、それと同じくらいすっかり緊密に一致していたのである。」

「『友情とは調和からなる平等である』という章句を人間にあてはめるならば、調和とは相反するもの一致である。相反するものとは、わたしと他者である。両者はあまりに隔てられており、その一致が見出されるのは神のうちにのみである。人間同士の友情と正義は——正義が状況によって外側から与えられる場合を除いて——ただひとつの同じ事柄である。プラトンもまた『饗宴』で、完全な正義と愛は同じものである、と述べている。「福音書」で人間同士の関係が語られる際、愛と正義という言葉は、区別なく同一の意味で用いられている。「福音書」では施しをめぐって正義という言葉が何度も用いられ、食べ物がなく困っているときにキリストに施しをしてくれた人は正義の人と呼ばれている。完璧な友人同士とは、生の大半で絶え間ない関係をもちながら、つねに互いが互いに対して完璧に正義である人間同士のことである。正義の行為は友情の閃光であり、ほんの一瞬ふたりの人間のあいだに瞬くものである。もし正義が一方向的なものであるならば、その友情は深い傷を負ったものとなるだろう。／友情という言葉が指示する三つの関係それぞれにおいて、神はつねに媒介者である。神は、神と神との媒介者であり、神と人間との媒介者であり、ひとりの人間ともうひとりの人間との媒介者である。神はその本質からして媒介である。神は、調和をもたらす唯一の原理である。だからこそ、神を讃える際、歌がふわさしいものとなるのだ。（・・・）これはきわめて稀なことであるが、ふたりの真の友人が時間・空間のどこか一点にいるとき、神の名がどのように希われようと、キリストはふたりのあいだにいる。あらゆる友情は、キリストを通してやってくるのだ。」

正義を語る者よ  
そこに愛はあるか

愛のないとき  
正義は暴力となる  
言葉もまた暴力となり  
歌は失われてしまう

正義を語る者よ  
そこに友情はあるか

友情のないとき  
正義は支配となる  
言葉もまた支配となり  
詩がそこから生まれることはない





■仲正昌樹『貨幣空間』（世界書院 2006.9）

■仲正昌樹『お金の「正しさ」はあるのか?』（ちくま新書 2004.10）

「全く異質な〴〵もの、同士を等価なものとして結びつける「貨幣」の機能と、「主体＝主観性」の間には不可分の関係がある。そのこと自体は、ある意味極めて明らかなのだが、近代の良識的な市民は、それをあまりストレートに認めようとしない。たとえ、我々の経済活動が貨幣によって規定されているとしても、「心」の奥底には、「決して金で買えないもの（＝真の人間本性）」があると信じたいのである。だから、サヨクな人たちは、「金で買えないものはない」というホリエモンの挑発的な言い回しに過剰なまでに反撥する。（・・・）／私は、それれも敢えて、「本当に金で買えないものはないのか?」について哲学的に掘り下げて考えてほしい、と訴えたい。確かにこの世界には、直接的に貨幣で値段が表示されていない〴〵もの、はまだたくさんあるが、我々は、そのような「金で買えないもの」を知らず知らずの内に、貨幣によって評価しようとする。「金で買えない感動」を伝えてくれる映画や小説、音楽作品などに、人は惜しげもなく金を払う。「金で買えないものはない」という暴言を吐いて、下流の人々の心を傷つけたホリエモンを、ラディカルに、批判するサヨクな論客の本が、飛ぶように売れる。売れることによって、その論客は、「金で買えないもの」の存在を教えてくれた英雄として通用するようになる。ヘンテコな話であるが、良識的な市民たちは「世界の中心に金で買えないものがある」という幻想を、金を払ってでも買おうとする。／かつて浅田彰は、『構造と力』（1983）や『逃走論』（1984）で、労働価値説に裏打ちされた資本主義的な「労働＝生産」秩序から逸脱して生きる「スキゾ・キッズ」の到来を予言した。「労働して金もうけする主体性」を拒否し続ける、日本版ニート。は、究極のスキゾ・キッズと見ることもできるが、人々は、ニート、の更なる増大によって、資本主義的な経済秩序が崩壊することに危機感を抱いている。サヨクの人々を含めて多くのマジメな市民たちが、ニートの若者を「貨幣空間」に再び参入させようとしている。「金だけで幸福になれるとは限らない」というのは恐らく真理であろうが、目の前の現実を見る限り、安易に「金なしで幸福になれる」と言うこともできない。「金」がどこまで、我々の「生」の中に浸透しているのか、本当のところなかなか分からない。」

金よ金よ

おまえの魔術は何のため

おまえの魔術は

すべてをつなく

けれど同時にたがいを縛り

魂さえも縛るもの

金さえあれば何でも買える

金では買えないものもある

どちらも金に縛られて

貨幣空間を彷徨うか

貨幣空間の平面で

右にふらり左にふらり

その奥行きはどこにある

金がなくては生きてはゆけぬ

金があっても死は避けられぬ

ならば地の果て金の果て

魔術の尽きた死の彼方

金の仮面のその下に

隠され続けたその素顔

金よ金よ

おまえの魔術は何のため

愛の錯誤か夢まぼろしか

夢の後にはなにが来る

おまえの素顔はどこにある



野暮なのは嫌だね  
粹なのがいいね

あるがままは  
よほどでない  
野暮になってしまうね

純粹もまた  
汚れを通さない  
すぐに野暮になるね

見たまを描くのは  
見えないものが見えないから  
とんだ野暮でしかないね

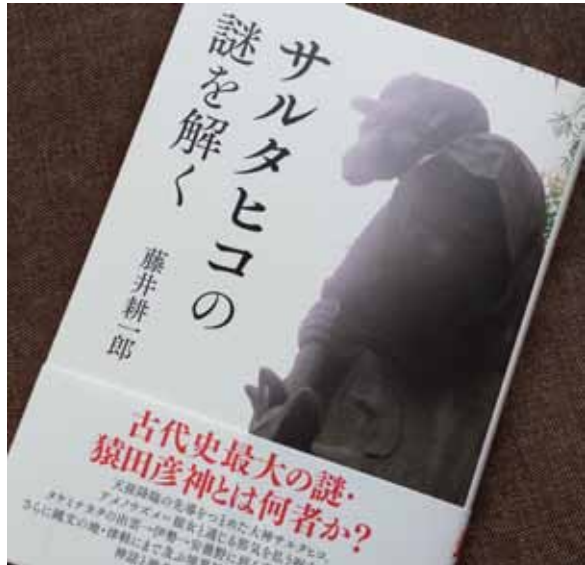
思ったままを書くというのは  
あまりに言葉に失礼で  
話にならない野暮だろう

おもしろき  
こともなき世を  
おもしろく  
何に見立てて  
生きてみようか

■鈴木松美（編著）『日本人の声』（洋泉社 2003.3）

「一般的に、日本人は低くて響き渡る声を「洪くていい声」だと評価する。（・・・）／なぜ日本人は低くて響き渡るような声を「いい声」だと認知するのだろうか。／これは、世界共通の認識ではない、という点にヒントが隠されている。／一般的に、欧米人は非常に高く透き通るような声を「いい声」だと認識しているが、逆にアジア人は往々にして日本人同様、低くて響き渡るような声を「いい声」だと認識する傾向にある。／このことから、コンプレックスの裏返し「いい声」になっていると考えられるのではないだろうか。要するに、自らが持っていない、なかなか出せない声を求めていると思われるのである。／特に日本人が「いい声」だと認識する低音には共通点があり、ある非常に低い周波数のところ（440ヘルツあたり）が強く出ている音をさしている。一般的には、背が高く、えらの張った人が出しやすい声だといえる。／ただ、忘れてはならないことが一点ある。実は日本人が「いい声」だと認める幅は、欧米人の感覚に比較すると非常に広いということだ。／たとえば、先ほど挙げた「だみ声」。／欧米では、だみ声のような濁った声が「いい声」だと認識されることはないが、日本人は状況によってはそのだみ声こそが「いい声」なのだと感じ、「枯れたいい声」として評価したりする。事実、浪花節では「だみ声」に称賛が集まる。／この感覚は、わたしが調査しているかぎりにおいて、世界的に見ても日本人特有のものといえる。つまり、日本人は声に対して非常に寛容なのである。これは日本独自の声文化が育んできた「声観」と呼べるだろう。」

「もうひとつ、日本人特有の「声観」と呼べる、音のとらえ方を考えてみたい。／たとえば、鈴虫の羽音やウグイスの鳴き声に情緒を感じる感覚、川のせせらぎや木々の葉音に侘び寂びを感じる感覚、こういった音のとらえ方は、実は日本人独自のものといえる。／こうした感覚を日本人が培ってきた背景に、わたしは日本文化の特徴ともいえる「見立て」があると考えている。／「見立て」とは、たとえば、日本庭園の鑑賞方法などがよく知られている。大きい石を島に見立てたり、玉砂利を海に見立てたりして、その庭園を鑑賞するわけだ。また、茶室も「見立て」としてできた空間である。茶室に入るためのにじり口は、中の異空間に入るための入り口として見立てられ、中に掛けられている掛け軸にはその異空間の風景が描かれていると見る。そのほかにも、現代でも人気を博している歌舞伎も「見立て」の世界観で成立したものだといえる。／つまり、日本人はあるものをそのまま受け取るのではなく、「見立て」を通して受け取る感覚にたけているのだ。（・・・）そのものズバリを表現せずに周囲の部分表現することによって、その中新聞を想像させるといった方法を好む。」



■藤井耕一郎『サルタヒコの謎を解く』（河出書房新社 2015.10）

「オカやウカが「食物の女神」の名を表していることは、オカメが食物女＝オカ女を語源としていた事実を物語るだろう。（…）／オカメはサナダの女神あるいは巫女だったとそろそろ結論してよさそうだ。ウソブキを祖先にもつかもしいないヒョットコと食物神のオカメは、やはり男女一対になる面のようなものである。そして、仮面をかぶた巫女は<神懸り>ができる特別な人間に変身を遂げるようになった。おそらく仮面の本来の役割は、シメナワと同じような「バリヤーを張る」ことにあり、それが「神との仲立ちになる媒体」としての機能になっていったとも考えられる。／その神こそがサナダの神（サナダヒコ）であるサルタヒコだったのではあるまいか。だが、面はやがて、巫女の道具から、それ自体が神とみなされるようになっていったようである。そして、<神懸り>すると神が乗り移る巫女だったオカメも女神に変わった。神事に仮面が用いられたサルタヒコも、そこから仮面でイメージされる存在に変化したようである。／一方で、<浮かれ女>や<遊び女>のように、神に近い存在だった巫女が墮落する逆の働きも起こったらしい。その意味では、ヒョットコは『記紀』によって卑小で滑稽な存在に貶められたサルタヒコの「なれの果て」の可能性もある。／それにくらべると、オカメは<にらめっこ>にめっぽう強かった「面勝つ神」＝アメノウズメとして、『記紀』に描かれた本来の姿を留めているような感じがする。」

ヒョットコ面に姿を変えた  
サナダの神よ  
汝は今何を舞う

オカメの面に姿を変えた  
ウカの女神よ  
汝は今何を舞う

神の宿りのために  
仮面は生まれ

人は仮面となりて  
神を舞い  
夢幻を舞う

ああサルタヒコよ  
ああアメノウズメよ  
今や神なき世に神を舞うか  
霊なき世に霊を現すか